

高野実思想の継承と発展を

——戦後労働運動二回の大高揚とその反動

樋口 篤三

総評結成の中心を担った高野実主宰で刊行された『労働情報』は、1960～63年（第1期）と、77年1月の大阪集会で発行を決め、2回の準備号の後、スタートした。日本資本主義ⅡJC路線と対決する労働運動の構築をめざし、日本労働組合運動のなかで存在感がある潮流となった。67～68年（第2期）を引き継ぐ第3期として77年に樋口篤三さんを編集人として創刊された。

戦後日本労働運動は2回の大高揚があった。第1は敗戦直後の1946年1月から47年の2・1ゼネスト攻勢の時で、「統一戦線ができれば左翼政権ができる」（朝日・後藤基夫Ⅱ後の編集

局長)というところまでいったが、日共と社右派の双方からつぶされた。

第2の大高揚は、60年安保、三池大闘争で「神武以来の大衆闘争」といわれた。2回とも、国労と全通、大金属が主力であった。

もう一つ、3回目は70年代前半で、民間大手は軒並み資本・JIC派に押さえ込まれたが、公労協・官公労と民間中小は(特に全金、全港湾)戦後最大に戦闘化した。

そのピークは74春闘で、賃上げ平均2万8千781円で32・9%アップ、争議行為を伴うものの9千581件、損失日数966万2千145時間に及んだ。労組組織率は33・9%(49年がピークで55・8%)に回復した。75年のスト権ストでは、国労、動労が新幹線を8日間止める戦闘力を示した。

だが、動あれば反動あり

自民党の中曽根幹事長、若手議員らが「労使関係ではなく、治安関係」として対処。ゼロ回答のみならず、202億円の損害賠償を労組に突きつけた。

それに先立つ75春闘での賃上げは、前年の半分以下の13・1%に巻き返されていた。日経連とJIC派(国際金属労連日本協議会)は一体となって戦闘的な労働運動を押さえ込み、以来総評は鉄鋼中心のJIC(他に自動車、造船、電機、機械)に追いまくられた。

数年間の高揚はウソのように潮が引き、運動はアツという間に沈滞し、全戦線に危機感が満ちていた。左の全戦線でも事態を茫然として見ているだけのように見えた。

反撃の戦略と前段の蓄積

私は、地区青年労働者オルグをはじめ、生協、工場、党等でのオルグの経験を『オルグー過去、現在、未来』(70年)に著し、高野にほめられたことがあった。主体の危機を何回もくぐり、一人になっても闘いを挑んだことも数回あったので、よし、闘おうと、まず一人でハラを固めた。また、75年から季刊『労働運動』の編集長をつとめ、大阪の全金田中機械支部をはじめ、国労、全通、自治労等の幹部活動家など、同憂の同志たちをかなり知っていた。それを前提とした私の戦略構想は、次のようであった。

①危機と闘うことを通じて日本労働者階級の「多数者獲得」をめざす(ドイツ革命下でのレーニンの言葉。日本では神山茂夫と高野実が提唱。高野が総評結成で実践)。②日本はイタリア、フランス、中国等に比べてはるかに弱かった統一戦線の志、思想、路線を労働戦線で追求する。③闘いの拠点をつくる。④戦後労働運動で政治的に最も優れて有用有効であったのは、高野派と国鉄革同(その頃前後まで)であったので、その今日版をめざす。⑤勝海舟が幕末に唱えた「日朝中」三国連帯の思想と国際主義を今に追求する。

『労働情報』形成過程では、新左翼以外は初対面の人々が大部分であったが、4顧問（市川誠、兼田富太郎、松尾喬、清水慎三）、吉岡徳次（全港湾委員長）、中江昌夫（動労書記長）、沖繩の照屋秀伝（沖繩市職労、左派の中心）をはじめとする多くの活動家に働きかけたが、断られた人はゼロに近いという反応のよさであった。危機が極めて深刻であり、その根元的突破と本気でやろうとした志と闘う路線、その熱情、幅広い統一戦線の構想力等が受け入れられたのである。

全国労働者集会（大阪集会）へ

「1月中旬、大阪で開催された全国労働者討論集会は、たんに77年初頭に開かれ、77春闘の質的転換を目指したのではなく、70年代後半から80年代に踏み込む労働者運動にとって、重要な布石を打ったものとして、私は評価している。ひとことでもいいってしまえば、それは『コロンプスの卵』といえるものであった。」（鎌田慧「季刊労働運動」77年）

市川誠は、前年まで総評議長を6年間務めた直後であった。初対面は、総評近くのソバ屋で昼飯を食べながらであったが、まず冷や酒を一杯頼み、ぐっと呑みほしたのを見て、豪傑だなと感じた。彼は高野を師と仰ぐ努力の人であった。

大阪集会のパネル・ディスカッションのさなか、隣にいた市川さんは、「コンクリートの通路まで座って、寒いでしょうねえ」、「会場が狭すぎましたねえ」と、私に話しかけた。このように、前総評議長は誠実で、階級的良心につらぬかれていた。

市川誠は、「労働情報に期待する」と、次の一文を寄せた。

『日本資本主義と対決する労働運動』と題する大阪集会に出席して、私は数多くのことを学んだが、特に考えさせられたことが二つある。

ひとつは全国各地に、それぞれがきびしい条件にありながらも、日夜体を張って頑張り続けている、多くの労働者がいるということである。このような活動家の日夜にわたる活動に、総評を中軸とする日本の労働運動が支えられているということを改めて痛感したものである。

第2に、集会の表題が示すように、果たして今日のわれわれ日本の労働運動が、資本と真に対決したものの、資本に迫り資本が譲歩せざるをえないようなものとして展開されているかということである。

この点に関していえば、総評、さらには春闘共闘委員会の議長という職務を務めてきた私自身の責任もまぬがれるものではないことはいうまでもない。

資本に真に対決する労働運動をつくりあげていくことは、日本のすべての労働者に共通に課せられた課題であるといえよう。このことを願望として終わらせるのではなく、社会的に実態あるものとしてどう具体的につくりあげていくのが鋭く問われていると考える。その

ためには、まず最初に全国各地の無数の創造的な闘いを共通のものとしていくこと、さらには相互の連帯と団結を深めていくための相互批判と論争の場が開かれたものとして保障されるのが大切ではなからうか。労働者・人民が自らの闘いに誇りをもち、自己を天下に主張するところに人民が歴史をつくるダイナミズムが生まれてくるのではなからうか。……この意味で、労働情報誌が大きな役割を具体的に果たされることを心から期待する。」（創刊準備号77・2・25）

現場活動家が決起した

第1回大阪集会に対する現場の活動家の反応は次の如くだった。

「支部から5名参加したが、月曜日は頭がガチガチになって、やろうぜ。やろうぜと興奮していた。」（全港湾大阪港支部・高柳怜）

「政府危機と日本労働運動の危機というふたつの重大な情勢のなかで開かれた今回の討論集会は、まったく新しい時代を切り拓く大きな一歩が提起されたことになるとの深い確信をもちました。」

集会に参加して、これまでの自立した戦闘的な仲間たちの苦闘が、本格的な労働運動の激動のなかで、真に階級的な団結を求める潮流への飛躍が始まりつつあることを強く感じました。

……全国の仲間たちとともに闘いの先頭に立つ決意を新たにしました次第です。」（全電通・仙台分会・加藤）

このことは、ここ十数年来の各種集会をつうじてきたものにとっては、ある画期的なものがあった。

集会呼びかけ人の一人はいう。

「いままで何百回となく集会をやってきたが、いかに人を一人でも多く集めるかに苦労したが今度はまったく逆で、会場の都合で、いかに減らすかで苦労した。」（創刊準備号2・25）
「『一点の火花』を階級的労働運動再生の狼火に」

これは従来とは大きくちがうぞ、と参加者に実感させた内容があった。まず人々を驚かせたのが、市川誠（前総評・議長）、松尾喬（全金前委員長）、高橋鉄雄（新日鉄・現業労組書記長・社党協）、佐々木善治（動労札幌地本委員長）、西村卓司（三菱長船労組副委員長）、渡辺勉（全金一般南部支部委員長）、要宏輝（全金大阪地本組織部長）、司会・樋口篤三（季刊労働運動編集長）という、パネル・ディスカッションのメンバー。

また、大阪でもあまり知られておらず全国的には初めて紹介された南大阪の全金港合同・田中機械の「365日の階級闘争」の持続力、戦闘性、組織化は参加者に大ショックを与えた。そして、総評大会でも各地域でも聞いたことがない広がりや闘いが11の産別から報告され、各

単産傘下労働者を勇気づけた。

『労働情報』発刊へ

私は集会最後に労働情報発刊の構想、企画を発表しながら、「潮の流れは変わりつつある」、いや、変えつつあることを実感した。これはいける、ということをやナマに感じた。こんなことは人生で何回もない。

そして2回の準備号をへて創刊号を発刊した。

『労働情報』の題字は、高野を尊敬する兼田富太郎（吉岡徳次の前の全港湾委員長、総評副議長）の直筆であった。

なお、主なスローガンは次の通り。

- 日本帝国主義の労働版Ⅱ資本の第二労務部ⅡJ C路線と対決しよう！
- 日本労働運動の戦闘的伝統―職場闘争と反合闘争、地域闘争、破防法スト、安保・三池大闘争、マル生粉砕闘争等―を継承し、発展させよう！ ―略―
- 日本―朝鮮―中国人民の団結。アジア、第三世界の労働者、人民と連帯して日本帝国主義をうちたおそう！

● 労働者階級の終局的解放！

● 労働・生産の主人公をめざす階級的労働運動の形成を！

新左翼のみがかたまるという60年代の枠を一举に突破した戦略発想と戦略展開と人物の意外性等によって、販売部数は倍々にのび、当初2〜3千部、2〜3年と思っていたのが、半年間だけで9千部に2年目には実質1万2千部に、数年後には全国40都道府県の支局・分局が下から自発的につくられていった。

私は編集長、オルグ団長、委員長を兼任という変則体制だったが、ほとんどの支・分局に行き、講演をし、必ずその地の重要労組と幹部をたずねオルグし、活動家の家に泊まった。ホテルに泊まったことは原則としてなかった。

活動家の家に泊めてもらうと、その家族の構成と暮らしがよく分かった。その人間関係をできうる限り大切にし、今もつきあっている友人が幾多いる。

人は宝、しかし大きく抜けた人々

あらゆる運動、事業でもっとも大切なものは「人」である。西郷隆盛のいった「生命も、名誉も金も地位もいらぬ」志士（男女）である。

労働情報は、多くの人々に恵まれた。しかし、それでもかなりの見逃しと空白層があった。その最大ものは日共系の国鉄革同と中西五洲系、そして「新日和見主義」といわれた民青の

闘う左翼層である。

発刊当初、権力・資本とJ.C派との対決が中心だったが、日共とも対立していた。それは教師聖職論、自治体奉仕者論から「スト罪悪論」（国鉄分割・民営闘争時に1回もストの主張さえなかった）に激しく対立したからであった。

田中機械の労組掲示板にも日共批判のスローガンが常時かかげられていた。全金全国大会で全面対決となって日共系が退席したり、大阪総評や動力車も対決であった。

が78年、沖電機（電機大手10社）が78人のレッドパージを強行する。そのうち社会主義協会2人、労働情報・新左翼系が6人、他は日共系であった。

思想と路線は全くちがったが、権力・資本によって共に思想だけによって（マルクス主義）首をきる1950年―三池の再来である。それをみて、誌上で「方針はちがうが、レバには共同して闘おう！」と公的に主張し、田中機械支部は「反日共・糾弾」のスローガンをひっこめた。日共本部のある人々は我々のこの態度をみていて、その10年後には先方から話しかけてき、親しくなった。

『労働情報』の表紙に年2回ぐらい、丸木俊さんの直筆（本誌のみの）画がのっている。貴重な財産で、金に換算したらかなりの大金である。170・171号（84・8・10）「天皇の軍隊に虐殺された久米島住民、久米島在朝鮮人痛恨之碑」は、日本にただ一つしかない「天皇の軍隊」名をあげて糾弾した歴史に残る記念すべきもの―私の友人の国士館闘争の桑田博（読者）

が現地と話して建てたもので、この画によって全国にいられた価値あるものである。

丸木夫婦、国分一太郎らは、私の大先輩だが同じ時期に日共を除名された「同志」でもあった。

多くの同志、戦友が天界へ

この30年間、「日本人民の最良の子」だった先輩や同志戦友がかなり天界に旅立った。

顧問の市川誠（代表）、松尾喬（初代代表）、兼田富太郎、清水慎三、平垣美代司、その次の吉岡徳次、芳賀民重（東京地評事務局長）、或いは鈴木市蔵（国労、2・1ゼネストの中心者の一人）、長谷川浩（元日共労働部長）や林大鳳（動労委員長、労研センター京都代表）……。

私と同僚の小峰雄蔵（都教組大田支部委員長）、中川昭喜（少数反戦派から都庁職労委員長）、中島道治（繊維労連委員長）、そして清水慎三が高く評価した山口健二（アナルコ・コミュニティ）―相談して「新地平」誌に―、山田順三（道支局代表、北教組幹部）、そして私よりも若かった清水英介（電産中国副委員長、反原発ストをうった）。

本誌の目玉の一人、鍋田次郎（川口分局で50部組織した）、今野求、横山好夫、加藤滋（宮城分局連代表）、藤谷弘（東水労）、有富薫美（山口県富浦町議）、小谷大（私鉄南海）、藤崎武（新日鉄・社党協）……。三里塚の戸村一作、秋葉哲、石井武、小川源……。

大阪集会で毎年、情勢を見事に分析した山川暁夫、三里塚農民群像を連載し、革命百人衆を提起した前田俊彦、反原発（科学、技術論も）高木仁三郎、反公害の田尻宗昭、山下好文（佐世保地区労、諫早の自然を守る会）、沖繩の仲吉良新（県労協議長、自治労副委員長）、安里清信（金武湾を守る会）、松江澄（原水禁広島）、古谷能子（新宿へ平連）。

実に豊かな秀れた日本人民、労働者を代表する数多くの同志戦友に恵まれてきた。いつの日か「あの世」で再会し「魂の共闘」を組んで「この世」の人々を支援連帯するであろう。

「君まさは語らんことさわなるを南無阿弥陀仏我も老いたり」（明治維新から30年後に上野・西郷像のできた明治31年12月18日を記念した勝海舟の一句）

「意外な長続き」支えた人々

民主主義、社会主義は永久革命であり労働者階級解放は、夢のまた夢であり、生涯現役の闘いである。徳球の名言「報われることなき人民への愛と献身」の精神である。

本誌は私も含む大方の予想に反して、30年の歴史をきずいてきた。関係者の努力、地方読者の支え、協力者の力等の合算であろう。発刊3年後によせた国分一太郎（新日文議長）の、次の一文は今もつづく底流として心すべきである。

「50号によせて意外な長つづき

じつのところは、いったいどこまでつづくのかが気がかりなのであった。ひとつにも購読をすすめながら、そのことばかりを心配していた。それがこうつづいたのは、編集者たちの『よくうごく足』にもよるだろう。が、やはりそうでない点も、おおいにあるような気がする。

それは真に階級的な労働運動を、なんとかつくりだしたいと思いなやみ、夢みるひとがあったということであろう。そればかりでなく、からだごとぶつかっていくひとたちが、たくさんいたからだろう。誌面にすこしの型はまりも感じられないわけではないが、どうか、これから第二の意外、第三の意外をつくりだし、これを80年代の『通常』へともって行ってほしい。」

「夢みる」人々の期待に、運動に有益性をどれだけでもてるかで、次を決するであろう。

その組織者であることを！（文中の敬称は省略。肩書さは当時）

（附記）

江藤正修（27年も編集にたずさわった）が06年2月に「戦後左翼はなぜ解体したか」（寺岡和哉著のインタビュー）をものにしたが、同「資料集」に私は『労働情報』を語る―その成功と直面した壁」と『労働情報』時代の覚え書き』を計53頁も書いた。興味のあるひとはぜひ読みたい。同時代社刊（TEL03-3261-3149）

初出：『労働情報706号』 2006年11月1日号

〈記事出典コード〉サイトちきゅう座 <http://www.chikyuzanet/>

〈ひぐちとくぞう〉労働情報初代編集人・初代全国運営委員長

◇現代労働組合研究会のHPへ（TOP）

<http://e-kyodo.sakura.ne.jp/roudou/111210roudou-index.htm> 12

◇Ctrl キーを押さえながら上のアドレスをクリックすると、掲載サイトに行きます。